

山と博物館

第26巻 第1号

1981年1月25日

大町山岳博物館



雪おろして一階は雪の下—大町市中綱にて— 撮影 丸山隆士

雪に思う

冬来たりなば何とやらで、大北に住む人々は、白く頼りなげに降る雪の積る量と同じだけ首を伸ばして、春の訪れを待つ。待つ身は淋しいもので、来るやら来ないやら、何時になればこの雪が消えるのだろうか。人間は春が来る事を知ってはいるが、山や谷に住む一群の猿やカモシカには、苦しさの絶え間がないのではないかと、白魔に負いかぶさられた岳々を眺める。白いという事は美しさの代表であり、柔らかなイメージが湧く、が、今年の『白』は憎しみの、強固の感を得る『雪かき』スコップ、スノーダンプどれをとっても『掘る』を連想させられる。都会の人々の見る雪と、大北に在って触れる雪との差は、生活の違いではないだろうか(『三寒四温を信じる私は、積る雪を眺めながら三日間だけだから』と待つ、四日目の朝からは太陽が私の心の嬉しさと同じように、キラキラと輝やいて顔を出す、自然とは強く素晴らしい、人間だとしても抗しきれない。微力な人間の力は、防ぐのでなく、従う力となっている。屋根に、積った雪も綿帽子程度なら眺めるのにちやうど良いが、掛け布団が重なっているようでは、見る方も苦しい、文明の利器である車も、埋まれば単なる鉄クズ、一人や二人では押そうが突こうが動きもしない、雪だつて、溶ければ水、静かな雪の夜、各々コタツ、ストーブに暖をとりながら、静かさに畏敬の念さえもつてしまう、下手な唄や、つまらぬ笑いに自分を加え忘れよう忘れようと呼んでいる、人間とは、何と弱いものか!我が家の犬が産んだ子犬は、自分の身が見る見るやせ細る母犬の背に積る雪の下で、今日も懸命に生きています。我々人間も大きな自然の力に対する小さな力を持って明日の朝日のまぶしさを期待し強くならなくてはいけないのではないかと、今も間無しに降る雪を見る私の目の内には、人間として、待つ心と、努める心と、その雪を愛でる暖かさがあるつもりである。

(大町山岳博物館友の会 荒沢進)

冬の仁科三湖で見られる鳥たち

三石 絃

「仁科三湖の冬鳥」というテーマで依頼された。冬鳥といえばカモ類だが、カモ類の状況については、以前の誌に書いた(「鴨たちの駆込寺としての湖」禁猟区としての木崎湖のもつ意義」、第22巻第9号)。一九七七年の様子と今日とを比較すると、種類や個体数の比率、それに分布域などは、あまり変動が認められず、マガモ・カルガモ・キンクロハジロという優占順位にも変化はない。

そこで、本稿では、主にカモ類の生態と、冬鳥(渡りの区分では、シベリア・アラスカ等から飛来し冬期だけ本邦に留まる種)だけではないけれども、冬の湖とその周辺の様々な環境に住みつき、比較的観察頻度の高い野鳥を紹介する。探鳥、今どきの面白いことばを使えばバード・ウォッチングをする際の湖畔にでかけていただきたい。厳寒の湖とその周辺にも、その気が出かければ、あたたかい生命のいぶきに接することができるのだから。

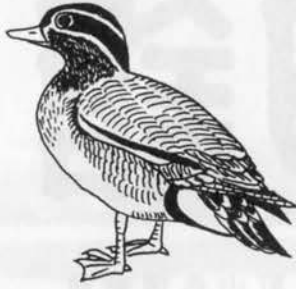


図1 コガモ(雄)

マガモ

猟期前の渡来直後は、青木湖のエビスマ原よりの湖面に多数憩っているのがみられるが、猟期に入ると、全てと違っていくらい木崎湖に移棲してしまう。木崎湖には、周辺の河川にいた個体も集合してくるので、数千羽に達する。主に中央部の湖面で日中は休息し、夜間付近の水田地帯や水辺におもむいて、主に落穂や湿生草木の実を採餌する。

国道から見ると、木崎湖の中央部の湖面上点々とカモが浮かんでいるが、この半数以上はマガモとみてよい。

注意して見れば、肉眼でも「青首(アオクビ)」と俗称されるマガモの雄の特徴的な青色が陽光に輝いているのを見ることができ。雌は全体に黄褐色で、大部分は雄と雌が番になって憩っている。中綱湖にはいない。面積がせまく、カモにとって安全水面でないからだ。

カルガモ

マガモと同様な動態を示す。すなわち、湖面を安全な休憩場所として利用している。マガモの次に個体数が多い。海ノ口側の、かなり岸によつた水面に、茶色っぽくて地味なカモが群れていれば、それはカルガモである。写真を撮らうなどと、車から下りて近よると、いつのまにかマガモのいる中央部に移動してしまう。そしてしばらくすると、また元の位置に戻っている。

カルガモは留鳥である。各地の河川で、かなり普遍的に繁殖している。たとえば居谷里湿原でも難ずれの母鳥をみかけることが多い。おそらく、仁科三湖でも、湖岸が果引きに適するような地形や植生の場所(たとえば木崎

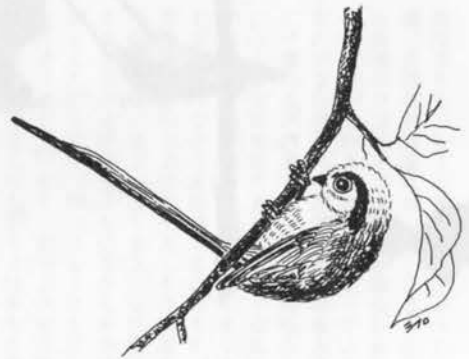


図2 エナガ

湖の西海ノ口側)では繁殖しているはずだ。だが冬の大部分のカルガモは、周辺で繁殖したもので、あるいは異界のもの、さらにはシベリアなどからの渡り鳥も含まれているはずだ。けれどもその比率などの詳細はまだわかっていない。

キンクロハジロ

今まで紹介したカモが、陸圏型(陸ガモ)と称されるのに対し、このカモは潜水型あるいは海ガモと呼ばれる。主に淡水で越冬するのだが、水面を単に逃避の場として利用するのではなく、水底の植物の芽や巻き貝などを採食している。

したがって深い湖には、そんなに潜水能力がないのでみられず、浅い湖に主に住みつく。水深のある青木湖には渡来せず、木崎湖の湖岸近くの水面に十羽から二十羽前後の群れでみられる。さかんに潜水しているので、群れの総数をつかむには根気がいる。時には群れのすべての個体が潜ってしまった。突然群れが消えた錯覚におちいることがある。

東海の口のハスの枯葉のある部分でよくみられる。ドライブインに車を停めて、そつと

線路にそつて、近づいてみよう。後頭部の羽毛が長く羽冠をなしていること、雄の翼鏡(体側)が白く目立つので、すぐ識別できる。

コガモ

名前のように小型のカモ。カモ類のなかでいちばん小さい。マガモの半分しかない。雌は茶色で地味だが、雄は特に頭部が美しく、一見してそれとわかる。長くて背中まで続く白で縁どられたあざやかな緑のまゆと、それをつつむ赤褐色のコントラストがみごとだからだ。

多くのカモがシベリアから渡つて来るのに対し、標識調査結果(日本の鳥学研究所のセンチターともいうべき、山階鳥類研究所の仕事で、鳥の足にマークの足環を付し、捕獲された場所から渡りの経路を明らかにする研究)によると、カムチャツカ半島やサハリンからの渡来が最も多い。

したがってこの種の群の中には、別亜種のアメリカコガモが迷い込んでいることがある。生坂ダムでも発見されている。コガモの群れの観察にあたっては注意が必要。雄の胸部側面の白く大きな二日月形紋が区別点である。

カイツブリ

木崎湖と中綱湖に一年中みられる。ただし、湖が全面結氷すると、生活できないので大きな川(おそらく犀川)に移動する。潜水して魚を採っている関係である。したがって湖面でも岸寄りの浅い部分で生活する。木崎湖では、旅館の多い農具川への流出部でよくみられる。ボートで近づくと五メートル位まで接近を許す。巧みに潜水する。ボートの軸先にヒョッコリと顔を出すことがあり、お互にびつくりしてしまう。まるでいたらず坊主のよううにひょうきんな顔である。

カモに似ているが、ガンカモ科ではない。カイツブリ科に属す。この科で信州で記録されているのは、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カムムリカイツブリ、そしてカイツブリの六種。この種以

外は全て冬鳥で、いずれも諏訪湖や千曲川の下流での記録だ。もしかしたら仁科三湖にもひそかに飛来しているかもしれない。注目したい仲間だ。

セキレイの仲間三種

セキレイと呼ばれる小鳥のうち、キセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイの三種が冬の湖岸を離れない。

波打ち際は、どんなに雪がつもっても、地面が露出している。だから水辺は鳥たちにとって貴重な冬の採餌場となる。

キセキレイは名の通りに黄色だから区別は簡単。セグロとハクの識別はちよつと熟練を要す。一年中居て、背中がやけに黒いのがセグロ、秋から春まで留まって、なんとなく灰色っぽいのがハク。もうちよつと詳しくみると、ハクセキレイの顔は白くて過眼線が黒いのに対し、セグロセキレイは黒い顔に眉とのがはつきりと白い。

カモの観察に夢中になつていて、いつのまにかセキレイが足元近くまで来ていて、ビックリさせられることがある。

水辺にはツグミ、ムクドリ、キジバトなどもよくやって来る。沖ばかりでなく足元にも注意したい。

エナガ

水面とは全く関係ない留鳥。水辺の雑木林を主な生活場所としており、雪が深くなつても、この林を離れない。カモの観察に行つた折、周辺の林の鳥にも是非注意を向けて欲しい。

おそらく、一年中仁科三湖周辺の林にとどまるのは、この鳥とキツツキの仲間ぐらいではないかと思う。雪のつかない樹枝が主な採餌場だからだ。

林の鳥でいちばん個体数の多いシジュウカラは、主な採餌場所が

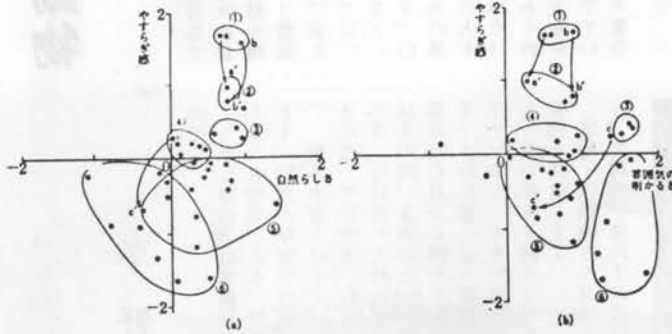


図3 鳥のいる環境のやすらぎ感(品田1980)。①鳥多い、近い、オギの原(多摩川)②鳥視界中心からはずれるが多い、オギの原(多摩川)③鳥多い、遠い、オギの原(多摩川)④鳥多い、少し人工的(建物や工場の煙突が対岸等にみえる)⑤鳥いない、アシの原(大井埋立地)⑥鳥いない、オギの原(多摩川)

地上だから、深い雪の湖岸から避難して、村落に入り込んでしまふし、ホオジロやカシラダカ、それにジョウビタキなど、雪の少ない頃の湖岸のブッシュの常連も、連日の降雪とともに、もつと雪のない場所に移つてしまつて姿を見かけなくなる。

エナガは「柄長」。尾の長いところをヒシヤクの柄にたとえた呼び名という。形態の紹介はあえてやめる。スピッツみたいな顔で、柄の長いかわいらしい小さな鳥を見たらそれがエナガだ。

やすらぎ感を高める風物詩

文化庁文化財調査官の品田稔氏の近著「ヒトと緑の空間」(東海大学出版会)は、氏と共同研究者が「人間にとって自然はなぜ必要か」という問に対して、さまざまな角度から分析している。

その一部に「やすらぎ感」という調査結果がある。簡単にいうと、どんな風景にやすらぎを感じるかという統計調査である。ここにカモが登場するので、その一部について紹介しよう。

仮説は次のようである。

「われわれの祖先がヒトへの進化を迫りはじめたとき、折しも自由になった手を器用に動かす必要性がきっかけになって大脳の新脳化現象は急速にすすんだ。そのとき、視覚覚機構に緑の自然がパターンとともにとりこまれたとするなら、草原や疎林だけでなく、動物たちもいたではないか、アフリカの大草原の動物は対象にできそうもないが……」

そして、日本で比較的容易に調査できる場所というところで、多摩川及び東京港の大井埋立地で実施した。鳥のいる風景とそうでない場合とでやすらぎ感に差が生じるかを、評定者は特に鳥好きでないなどの慎重な配慮のもとに実施した。

その結果が第三図である。全体としてみると、①鳥がたくさんいて(カモやカモメ)、②近くみられ、③周囲の環境がよいほど、やすらぎは高くなつていく。

この二つの調査地にくらべ、明らかに仁科三湖の③の条件はよい。なにしろ北アルプスの名山、鹿島槍や白馬連峰が影を映す湖である。

したがって、冬の仁科三湖という自然は、日常の煩瑣な生活からのがれ、神経にやすらぎを与えるのには、実に適した場所といえそうである。マジジャンやカラオケで一時的なやすらぎを得るのもよいが、是非一度、仁科三湖に魂の洗濯に出かけてはいかがだらう。

本格的に探鳥をこころやす方々に漫然と湖に憩うカモの群れをながめただけでもやすらぐことはできる。

けれど、先のべた各種の生態や個体数の増減などの、もう少しつつこんだ観察をこころざす方もいるはずだ。そんな人のために、

雪深い湖に探鳥に出かける時のこころえを、三述べてみる。

○順光は午前中

稲尾あたりから東海ノ口まで湖岸にそって歩きながら探鳥するのが、最も普通だ。カモが順光で見られるのは午前中。十時から十一時頃が、気温もあがってきて、風もおさまるので、この時間を観察に集中できるように日程を組むとよい。

○まず防寒と防風対策

とにかく寒い、それに風があるのが普通。キルテングなどの防寒具で武装しないと、とてもたない。探鳥行は、歩いてるよりもどまつている時間の方が長い。足まわりにも気を配るべきだ。雪が深いことも枚重ね、長靴だとしたら、厚手のソックスを二枚重ね、ズボンのすそは、外に出しておいた方が雪が入らない。冬山登山用のヤッケとオーバーズボン、これは寒風の中に長時間身をさらすのに、防風と保温の上から、もつてこいの服装だ。あまり高価ではないから、冬期のバード・ウォッチングを志す者は一そろいそろえておいても無駄にはならない。

○カモの観察に望遠鏡は必需品

双眼鏡の必要なことはもちろんだが、米粒のようなカモの群の中から、一羽か二羽しかいないめづらしい種をさがしたり、ディスプレイなどの細かな観察をするには、望遠鏡があるとないとは決定的に違う。ベテランが「プロミナー」と呼ぶ、小型の地上望遠鏡が欲しい。口径六センチ、二十五倍位の接眼レンズのもののが最もよい。数社から市販されてよい。そう高価ではないから一台求めることよい。くどいようだが風が強い。ガツチリした三脚も必要。

(長野県山岳総合センター専門主事)

雪と植物と動物

水野昭憲



すっぱり雪に埋って静まりかえる白山



なだれ跡で餌を探すニホンザル

冬、山が一面の銀世界になると、豪雪地である白山山ろくでは、谷間の小さな村々の背後の斜面に、小規模ながらブナの原生林が残されているのが目につきます。こういう雪国の村落にとつて、雪崩は自然災害の中で最も重大なものでした。家々に向いた斜面では、雪崩止めのために、その土地を共有地などにして木を伐らないようにしてきたのです。白山でも原生林は林道の入っていない本当の奥地に残っており、低山帯でブナの大きな見られるのはそのような雪崩止めの林だけにかけて雪止め柵やスノーシェードを建てていますが、森があればそのような施設は不要な

のです。しかし草は、急な斜面では地表に養を着せられないまま枯死してしまっています。斜面の草地では毎冬雪が滑っているうちに、樹木が育ちにくく、いつまでも草地のままになっています。白山ではこのようなところを「なばた」と呼んでいるのですが、ここは冬の間、食物の乏しい動物たちにとつて、雪の割れ目から餌をとれる重要な場所なのです。また早春には一番先にフキノトウ、ウド、クサツテツ、イタドリなどの山菜が若芽を出し、長い飢えを耐えてきた草食動物に豊かな食物を供給します。

北陸・信越地方の山地は、日本でももちろん、北緯四十度以下の温帯ではまれにみる豪雪地帯です。十二月から三月にかけての長い間、北西の季節風に乗ってくる湿った風が、山岳地帯にぶつかって大雪を降らせます。その雪が樹木の形をかえてしまっています。雪の少ない地方の林の中は比較的歩き易いのに、雪の多い白山では、夏でも斜面の林へわけ入ることは容易ではありません。かん木の幹が地上から大きく曲っていて、一本一本の木をかき分けないと前進できないのです。冬に雪の重量と圧力で幼木やかん木は斜面の下方へ倒されて、地上にはうようにして埋ってしまっています。雪解けとともにそれらの木は再び頭をもたげますが、根元はもとにもどらず大きくカーブしています。毎年これをくり返してやがて木が成長しても根もととは大きく曲っています。植林したスギのように手入れをし、春に縄で引いて起してやっても、地上から五〇センチや一メートルは曲っているのでも材として使えないのが多くあります。

雪国で育っていたり、造林に使われる木は幹がしなやかで、少しくらい曲げられても折れないのが特徴です。生物は雪に耐えるようにいろいろの適応をしている一方で、雪に守られている面も見がせません。もともとこの地方は冬の気温は零下何十度にはなりませんが、それでも越冬中の生物にとつては厳しいものにちがいありません。そんな時でも雪の下は案外あたたかいものなのです。冬山へ登山をしても、雪洞の中は暖かいといわれるのと同じことです。雪のない地方では長い霜柱が立つ頃でも雪の下の地表は凍っていません。そうして地中には植物の芽や根、さらには落葉の下にひそむ昆虫などを雪が寒さから守っています。また雪は草食性の動物から植物を守っています。サル、カモシカ、ノウサギなどは深い雪の下の植物を食べることはできません。長野県南部や岐阜県で大問題となっている、カモシカの植林木への被害は、雪国では非常に少ないのです。その理由の一つに、カモシカ

が針葉樹を食べる冬の間、スギなどの若木が雪に倒されて埋ってしまっていることがあげられます。成長して雪の上に立っている木の枝を少々食べられたとしてもあまり問題にはなりません。ノウサギの害についても同様で、雪の少ない能登半島では、スギに対する被害が大きく、ノウサギ対策にキツネを放しているほどですが、雪の多い白山ではあまり問題にならず、ノウサギが少ないといって猟師が不平をいうほどです。

このように雪国の植物と動物は、雪とさまざまなかわりあいをもって、長い冬をすごしているのです。



毎年雪が滑るので木が育たない草地「なばた」

(石川県白山自然保護センター)

山と博物館 第26巻 第1号

発行所 長野県大町市TEL②〇二一

印刷所 長野県大町市依町大町山岳博物館

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号 長野二二二九三